

地球の歴史を物語る断崖

早朝、バスで埼玉県栗橋町を出発した親子 38 名は、昼前、九十九里浜を一望できる刑部岬展望台に到着。眼下の飯岡漁港を指さしながら、講師の清野先生が、「みなさんが食べる魚を採るために、港をつくって防波堤を築きますが、そうすることで浜へ流れていた砂が堰き止められ、侵食が起きてしまうところが出てきます。

人間と自然が共存していくことは、とても難しいことなのです」と説明してくれました。

展望台を降りて浜を歩くと、断崖が延々と続く屏風ヶ浦が現れました。よく見ると、崖の岩肌が縞模様になっています。

「これは地層で海に沈殿したものが縞になるのです」と言いながら、清野先生が足元に転がっている岩を手にとると、いとも簡単に崩れしまいました。

「埼玉県の土は、火山活動でできた関東ローム層という茶色の土ですが、同じ色の土が崖の上部に見られます。下の層は薄い灰色をしていて、岩といっても粘土のようにすぐ割れてしまいます」

土の層の違いは地球の歴史を物語っているとのこと。すぐ割れてしまう灰色の土からは、化石も出てくるそうです。



【刑部岬展望台に登ると、下には雄大な九十九里が広がっていました】



【断崖の下を散策。すぐそばまで太平洋の波が寄せています】



【簡単に割れてしまう屏風ヶ浦の岩。これは栗橋町の岩とは全然違うぞ！】

黒い砂の正体？

浜に戻ると、「鳥が死んでいる！」と誰かが叫びました。

「この鳥は大海原を旅しているとき、嵐などに遭って力尽きて落ちてしまい、流れ着いたのでしょう」

清野先生は、そう言いながら浜の所々に見られる黒い砂を指さしました。これは砂鉄です。軽い砂は簡単に流されてしまいますが、重い砂鉄はなかなか流れないで留まりやすいのだそうです。



【所々にある黒い砂の正体は何？
けっしてゴミなんかではありません！】

今度は、誰かがイカの死骸を拾ってきました。これは甲イカの種類です。



【甲羅のようになってひからびたイカ。確かに、これは甲イカと呼ぶにふさわしい！】

産卵期に打ち上がると、体の中身が抜けて甲羅のようなカラだけが残るので甲イカなのだそうです。海岸には、いろいろなものが落ちていますが、それぞれをよく観察することで、海に関するいろいろな不思議を知ることができるのです。



人工の伝染病

昼食のあとは、雄大な九十九里浜が延々と続く堀川海岸へ向かいました。一見、きれいに見える砂浜ですが、よく見るとペットボトルやシャンプーの容器などが落ちています。

「木くずなどは腐ってなくなったり、薪にしたして処理できますが、こうしたものは放っておいてもなくなりません」

みんなは、人工のゴミが自然を汚していることを、あらためて痛感しました。浜を歩いていくと、小さな崖が続く場所に出ました。

「これは浜崖と言って、波が寄せて海岸を侵食した結果できたものです。九十九里はウミガメの産卵で有名ですが、こうして浜が侵食されて崖ができると、波打ち際に近いところで卵を生まなければならず、その多くは波で流されてしまいます」

浜崖ができる大きな原因は、遠くに設置された堤防なのだそうです。堤防を作った場所は侵食を食い止めることができますが、そのしわ寄せが遠く離れた海岸に現れるのです。堤防を作っては別の浜が削られるという具合に、まるで伝染病のように侵食が伝染していくのだそうです。



【雄大な九十九里の海岸を、みんなで散策。今度はどんな自然を観察できるのか胸が躍ります】



【浜崖の正体は侵食の跡！ 遠い場所に設置した堤防の影響が思いもよらぬところに現れていました】

貝の年輪

延々と広がる遠浅の海。よく見ると、寄せた波は引いていくだけでなく、砂浜へしみ込んでいきます。こうしたことの繰り返しによって、浜は浄化されるのです。しみ込むときの泡には栄養分があって、それをカニ食べますが、これも浜の浄化につながるのだそうです。

浜には貝殻がたくさん落ちていますが、真ん中に小さな穴が空いた二枚貝の殻もあります。これは、巻き貝によって掘られて食べられた跡で、浜辺でも小さな生き物たちが生存競争を続けていることが分かります。

「貝殻をよく見ると、縞模様がありますが、これは貝が成長した跡です。また、縞のなかでゴワゴワしたところがありますが、これは貝が卵を生むとき自分の体を溶かすからできるのです」

貝の年輪、その1つ1つに生きた証が秘められていたのです。



【砂浜には、さまざまな貝殻が落ちています。つつい拾うのに夢中になってしまいます】



【砂丘に上がるとハマヒルガオが咲いていました。潮風に吹かれながらも、たくましく生きています】

さまざまな観察に没頭していると、あっという間に時間が過ぎてしまいました。今度は講師の先生がいなくても、親子だけで浜の探索が楽しめそうです。自然を観察することの面白さを十分に堪能した40名の親子は、名残惜しそうに家路に着きました。